

ベルリン大学（1909-1910）

寺田寅彦

青空文庫

一九〇九年五月十九日にベルリンの王立フリードリヒ・ウイルヘルム大学の哲学部学生として入学した人々の中に黄色い顔をした自分も交じっていた。厳かな入学宣誓式が行われて、自分も大勢の新入生の中にまき込まれて大講堂へ這入はいったが、様子が分らないのでまごまごしていると、中に一人物馴れた日本人が居ていろいろ注意してくれて助かった。それは先年亡くなった左そ右う田喜一郎博士であつた。自分よりはずっと前にドイツへ来ていて他の大学からベルリンへ転学して来たそうで言葉なども自由らしかった。総長の演説があつたが何を云つているか自分にはちつとも分らないので少々心細くなつた。それから新入生一人一人に総長が握手をするといふので、一列に並んで順々に繰出して行つた。世話をやいている事務官らしいのが自分に向つて何か言っているが、何を云つてるか分らない。左右田君に聞くと *Wollen Sie dort anschliessen?* と云つただけなのだそうである。カール総長の握手の力の強いのにびっくりした。総長にでもなる人にはやはりそれだけの活力があるのかと思われた。

入学証書と云つたような幅一尺五寸長二尺たけほどの紙に大きな活字で皇帝や総長の名を黒々と印刷したものを貰つたが文句はラテン語で何の事か分らない、見てみると気の遠くな

るようなものであった。日附の所に D. Berolini d. 19. mens. V anni ※とあつて下に総長の署名がある。「ベルリン」までがラテン化しているのでまた少し驚いた。それからもう一枚哲学部長の署名のあるこれもラテン語の入学免状を貰った。

式の前であつたか後であつたか忘れたが、大学の玄関をはいって右側の事務室でいろいろの入学手続をすませた。東京帝国大学の卒業証書も検閲のために差出したが、この日本文は事務の役人にとって自分の場合のラテン語以上に六^むかしそうであつた。色々記入する書式の中の宗教という項に神道と書いたら、それはどういう宗教だと聞かれて困つた。ドイツ語がよく分らなくては講義を聴くのに困りはしないかと聞くから、なにじきに上手になりますと答えたら *Na! Sehen Sie mal zu. と云つてにやにやした。最後の zu が妙にいつまでも耳に残つて気になつた。*

ベルリン着早々、中村気象台長からの紹介状をもってヘルマン教授を尋ね聴講科目などの指導を仰いだ。結局第一学期には、プランクの「物理学の全系統」ヘルマンの「気象器械の理論と用法」並びに「気象輪講」ルーベンスの「物理輪講」アドルフ・シュミットの「海洋学」「地球のエネルギーハウスハルト」「地球物理輪講」キービッツの「空中電気」ワールブルヒの「理論物理学特別講義」ペンクの「地理学輪講」という御膳立にきめた。

ヘルマンの講義はシンケル・プラッツの氣象台へ聴きに行った。王宮と河一つ隔てた広場に面した四角な煉瓦造りの建物で、これは有名なシンケルの建てた特色のある様式の建築として聞こえたものだそうである。昔は建築のアカデミーでシンケルが死ぬまでここに住まっていたそうである。

ヘルマン教授は胡麻塩ごましおの長髪を後ろへ撫なでつけていて、いつも七つ下がりのフロックを着ていたが、講義の言語はこの先生がいちばん分りやすくて楽であった。自由に図書室へ出入りすることを許されたが図書室の中はいつ行ってみても誰もいないでひっそりしていた。

一緒に講義を聞いたのはせいぜい五、六人くらいで中にたしかルーマニア人でオテテレサヌという男がいた。はじめ会って名刺を貰ってその名前をよんだときに思わず顔中が笑い出しそうになって困った。その後も教授が厳肅な顔をしてこの人の名を呼びかける度に笑いたくなくて困ったのであった。

これはずつと後のことであるが、ここへ通いながら纏まとめた小さな仕事を氣象のコロキウムで話すように教授から命ぜられたとき、言葉が下手だからと云って断ったが、自分がすけてやるからぜひやれと云われ、仕方なしに黒板の前に立たされた。その時の苦しみは忘

れられないが、しかしちよつと言葉につまるとヘルマン教授が狙っていたように必要な言葉をどなつてくれるので、その度に地獄で仏に会つたような気がするのであった。

いつかノールウエーのビエルクネス教授が来てこの輪講会の席上で同教授一流の氣象学を講じたときたいそう面白いと思つて感心したが、列席のドイツ氣象学者たち誰一人感心したように見えなかつた。ビ教授はそれから後にアメリカへ渡つてかの地でかの著明な大著を刊行したのである。小国の学者になるものではないという気がしたのはあの時であつた。

ヘルマンは古典に通じていて、氣象の講義にも色々古典の引用が出て来た。いつか私邸に呼ばれたときにその自慢の豊富な書庫を見せてもらつたことがあつたが、その蔵書の一部が教授の死後、わが中央氣象台に買取られて保存されている。

ヘルマン教授には三学期通じてずっと世話になつて特別の優遇を受けたような気がしていた。二十余年の今日でもこの先生の顔をありあり思い出すことが出来てなつかしい。

ヘルマンの教室を出て右を見ると河向いにウイルヘルム一世記念碑のうしろの胸壁の裏側が見える。河岸に沿うて二町くらい歩くと王宮橋シユロースブリュッケの西詰に出る。それを左へ曲るとウンテルデンリンデンですぐ右側の角かどがツオイクハウス、次が番兵屯所、その次が大

学である。物々しい番兵の交代はベルリン名物の一つであったが、実際いかにも帝政下のドイツのシンボルのように花やかでしかもしやちこぼった感じのする日々行事であった。この花やかにしやちこぼった気分がドイツ大学生特にいわゆるコアー学生の常任じょうじゆうざが坐臥を支配しているように思われるのであった。

大学の玄関の左側にはちよつとした売店があつて文具や、それから牛乳パンくらいを売つていたような気がする。オペラ、芝居、それから学生見学団のピラなどが貼つてあつた。十時頃にはよく玄関でシンケン・ブロートの立喰いをしながらそんなピラを読んでいる連中がいた。林檎の皮ごとぼりぼりかじり歩いている女学生も交じつていた。

プランクやシュミットの講義はここで聴いた。プランクの講義も言葉が明晰で爽やかで聞取りやすい方であつた。第一回の講義の始めに、人間本位の立場から物理学を解放すべきことや物理的世界像の単一性などに関する先生の哲学の一とくさを聞かせた。綺麗に禿げ上がった広い額が眼について離れなかつた。黒板へ書いてある数式が間違つたりすると学生が靴底でしやりしやりと床をこするので教場内に不思議な雑音が湧き上がる。すると先生は「ア、違いましたか」と云つて少しまごつく。学生の一人が何か云う。「御免なさい」と云つてそれを修正する。その先生の態度がいかにも無邪気で、ちつとも威張らず

気取らないのが実に愉快で胸がすくようであった。

プランクの明るい感じと反対にアドルフ・シュミット教授は何となく憂鬱な感じのする人であった。いつも背広の片腕に黒い喪章を巻いていたような気がする。しかし実に頭の良い先生だと思つて敬服していた。言葉は自分には少し分りにくいドイツ語であつたがその講義は簡潔でしかも要を得た得難い良い講義だと思われた。大事なしかもかなり六かしい事柄の核心を平明にはつきり吞込ませる術を心得ているようであつた。結局先生自身がその学問の奥底まではずきり突きとめて自分のものにしてしまつてゐるせいだろうと思われた。日本の大学でもこうした講義がいちばん必要であろうと思われたが少なくとも自分等の学生時代には高等学校と大学のコースの中間にこういうコースが抜けていたような気がする。それはとにかくシュミット教授についてただ一つ可笑おかしかった事は、先生が英国の数理解物理学の大家 Love のことをローフェと発音してゐたことである。

地球物理談話会もほんの五、六人の仲間であつたが、その中にまだ若いコールシュツター氏も交じつてゐた。地理教室の図書管理をしてゐた、オットー・バシンという人も同じ仲間であつたがこの人は聴講に身が入つて来ると引切りなしに肩から腕を妙におおぎよう大業業に痙攣させるので、隣席に坐るとそれが気になつて困つた。あんまり勉強し過ぎて神経を

痛めているのではないかという気がした。図書管理者などはどこでも学生には煙たがられると見えて、いつか同席したクナイペの席上における学生の卓上演説で冗談交じりにひどくこき下ろされていたが、当人は *Sehrgemeiner Kerl* などという尊称を捧げられても平気で一緒に騒いでいる面白い人であった。

大学講堂の裏の橡カスターニンウエルドシエンの森をぬけて一町くらいのゲオルゲン街の一区劃に地理

教室と海洋博物館とが同居していた。地理のコロキウムはここで行われ、次の二学年を通じて聴いたペンクの一般地理学の講義もこの講堂で授けられた。気象や地球物理に比べて地理の方は輪講にも講義にも出席者が多く気分がまるで変っていた。気象輪講会は何となく上品にのんびりしていたし、地球物理輪講会は生真面目でしかも家族的な気分であったが、地理の輪講会には何となく物々しい人間臭い気分があった。学者で同時に政治家らしいペンク教授の人柄がやはり反映しているような気もした。いつか、カナダのタール教授が来て氷河に関する話をしたときなど、ペンクは色々とディスクシオンをしながら自分などにはよく分らぬ皮肉らしいことを云って相手を揶揄やゆしながら一座を見渡してにやりとするという風であった。

ペンクの講義は平明でしかも興味あり示唆に富んだ立派な講義であると思われた。聴講

者には外国人も多かつたが外国人同士はやはり自然に近付きになりやすかつた。英国人のオージルヴィ君や、ルーマニアのギリツチ君などとよく教室入口の廊下で立話をした。後者は今ベルグラードの観測所に居るが前者の消息は分らない。ドイツ学生の中にはずいぶん不真面目らしい茶目や怠け者も居て一体に何となく浮世臭い匂がこの教室全体に漂っているのを感じた。自分は幸いにここでも図書室を自由に開放してもらつて、読書したりノートを取つたり、また河のメアンダーに関する小さな「仕事」をさせてもらつたりした。ドイツの学者のアルバイテンという言葉の意味がここに一年半通つて同学者のやり方を見聞している間に自ずから会得出来たような気がした。一に根氣二に根氣で集輯した素材を煉瓦のように積んで行くのである。

探險家シャックルトンがベルリンへ来たときペンクの私邸に招かれ、その時自分も御相伴うばんに呼ばれて行つた。見知らぬ令夫人を卓に導く役を云い付かつて当惑した。その席でペンクは、本日某無名氏よりシャックルトン氏の探險費として何万マルクとかの寄附があつたと吹聴した。その無名氏なるものがカイザー・ウイルヘルム二世であることが誰にも想像されるようにペンク一流の婉えんきよく曲なる修辭法を用いて一座の興味を煽り立てた。

ペンクは名実共にゲハイムラートであつて、時々カイザーから呼立てられてドイツの領

土国策の枢機すうぎに参与していたようである。今日はカイザーに呼ばれているからと云ったような言葉を何遍も聞いたような記憶がある。

いつか海洋博物館での通俗講演会でペンクが青島チンタオの話をしたとき、かの地がいかに地の利に富むかということを力説し、ここを占有しているドイツは東洋の咽喉いんこうを扼やくしているようなものだという意味を婉曲に匂わせながら聴衆の中に交じっている日本留学生の自分の顔を見てにこにこした。後年歐洲大戦の結果として青島がドイツの手を離れたときに何となくその時の講義が思い出された。

海洋博物館の前を西へ高架線に沿うて行くと停車場の前をぬけてスプレーの河岸へ出る。河岸に沿うて二、三町先のマルシャル橋の南詰の角に物理教室がある。ここで聴いたキービッツという若いプリバート・ドチェントの空中電気の講義は始め十人くらいの聴講者がだんだん減つてとうとう二、三人になってしまった、そのせいか数時間でおしまいになった。物理学輪講会はルーベンスが座長であつたがプランクもほとんどいつも欠かさず出席してこの集会の光彩を添えていた。老人株ではカナル線の発見者ゴルトシュタインや、ワールブルヒなどがおり、若手ではゲールケ、プリングスハイム、ポールなどもいた。日本人では自分の外に九州大学の桑木さんもある期間出席されたように思う。

鼻眼鏡でぬうつと澄ましていて、そうして何でも実によく知っているルーベンスの傍に、無邪気で気軽く明るいプランクがいて、よくわれわれでも知っているような実験的事実を知らないで質問する、若い連中が得意になつてそれを説明するのを感じて謹聴していた。純真な性格にもよるのであるが、しかし一方で誰にも負けないだけの長所をもち、そうしてそれを自覚している人でなければこれほど無邪気にはなれまいと思つたことであつた。後年アインシュタインに対する反ユダヤ人運動でひどく器量を悪くしたゲールケはやはり一座の中でいちばん人間人らしいところがあつた。若くて禿頭の大坊主で、いつも大きな葉巻を銜^{くわ}えて吞^{のん}氣^きそうに反りかえつて黙つていたのはプリングスハイムであつた。イグナトフスキーとかいうポーランド人らしい黒髪^{こくぜん}黒髯^{ひげ}の若い学者が、いつか何かのデイスクシオンでひどく興奮して今にも相手につかみかかるかと思われてはらはらしたことがあつた。ワールブルヒは腎臓でもわるいかと思われるように顔色が悪く肥大して一向に元気がなかつたが、ゴルトシュタインは高年にかかわらず顔色も若々しく明るい上品な感じのする人であつた。プランクはこの人に対していつもわざとらしくからぬ敬意を表しているように見受けられた。

物理の輪講会にはやはりまた特別の雰囲気があるのを面白いと思つた。自分の出席した

四つのコロキウムのそれぞれの雰囲気は学科の性質から来る特徴もあるにはあるであろうが結局はその集会を統率する中心人物の人柄そのものによって濃厚に色づけられているのであった。

次の冬学期には上記の先生方の外に、ヘルメルトの「地球の形」やオイゲン・マイヤーの「航空に関する応用力学」などを聴いた。ヘルメルトは赭^{あか}ら顔で眼をしょぼしょぼさせた何となく田舎爺のような感じのする、しかしどこかなかなか喰えないような気のする先生であったが、しかしやはり一とかどのえらい学者のように思われた。マイヤーの講義はザクセン訛^{なま}りがひどく「小さい」をグライン「戦争」をグリークという調子で、どうも分りにくくて困った。

ネルンストの「物理化学」もひやかしに一、二度聴いたことがあったが、西洋人にしては脊の低いずんぐりした体格で、それが高い聴講席をふり仰ぎながら活潑に手を振り身体を動かし頸を曲げてゼスチュアの賑やかな講義をして見せた。ポアンカレのいわゆるゲオメーター型の学者と思われた。聴講者はいつも教場に溢れていた。

講義や輪講の外に色々の見学があった。ヘルマン教授の許^{もと}にいた連中とリンデンベルクの高層气象台へ行つたときはベルゾン博士が案内の労をとった。この人はジューリングと

一緒に気球で成層圏の根元に近づき一時失神しながらも無事に着陸したという経験をもつていて、搭乗気球としての最高のレコードの保持者であった。鉄道幹線から分れた田舎廻りの支線、いわゆるクラインバーンの汽車の呑気なのに驚いたのはこの時である。東京の市電よりのろいくらいの速度で蛇のようにうねった線路を汽笛の代りにチャン／＼と絶えずベルを鳴らして進むのである。ポンチ絵のクラインバーンにはきつと豚や家鶏が鐵路の上に遊んでいるように描いてある、その通りである。ゲハイムラート以下皆往復共に四等客車に収まつて行つた。客車の中は白塗りのがらんどうで、ただ片側の壁に幅の狭い棚のような腰掛があるだけである。乗合わせた農夫農婦などは銘々の大きな荷物に腰かけているからいいが、手ぶらの教授方以下いずれも立ったままでゆられながら、しきりに大気の物理を論じ合っていた。

地理学教室ではペンクや助手のベーアマンが引率して近郊の地質地理見学に出掛けた。ペンクの足の早いのとベーアマンの口の早いのとに悩まされたが、ずいぶん色々とためにはなつた。

学生の有志の見学団で毎週のようにいろいろの見学参加募集をする。その広告が大学の玄関に貼り出される。当時は世界第一であつたナウエンの無線電信発信所を見物したのも

この見学団の一員としてであった。テレフンケン・システムの大きな蛇のようなスパークがキウンキウンと音を立ててひらめいては消えるのを見た。同じ団体にはいつてヘツベルの劇場の楽屋見学をしたときは、奈落ならくへ入り込んでモーターで廻わす廻り舞台を下から仰いだり、風の音を出す器械を操縦させてもらったりした。音を出すのは器械だが、音を風音らしくするのはやはり人間の芸術らしいと思われた。

三学期一年半のベルリン大学通いは長いようでもありまた短いようでもあった。たいそう利口になったようでもありまた馬鹿になったようにも思われた。引上げてゲツチンゲンへ移るときはさすがに名残惜しい気がするのであった。

マルシャル橋や王宮橋から毎日のように眺め見下ろしたスプレーの濁り水に浮ぶ波紋よみがえを後年映画「ベルリン」の一場面で見せられたときには、往年の記憶が実になまなく甦よみがえって来るのを感じたのであった。

(昭和十年五月『輻射』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「輻射 第一号」東京帝国大学理学部学生

1935（昭和10）年5月発行

※初出時の表題は「伯林大学」です。

※底本編集時に、亀甲括弧付きで以下の箇所添えられた注は、削除しました。

「Wollen Sie dort anschliessen ? [後に続きますか]」

「[#横組み] D. Berolini d. 19. mens. ※[#ローマ数字5、1-13-25] anni ※[#ローマ数字1909、272-3] [#横組み終わり] [ベルリン、一九〇五年五月十九日]」

「[Na i Sehen Sie mal zu. [まあみじついで]」

「[Schrägemeiner Kerl [大凡人]」

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ベルリン大学（1909-1910）

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>